
古代アメリカ学会会報

第 44 号



図版 テンプロ・マヨール博物館のツォンパントリ©千葉裕太

目 次

◆新会長あいさつ	1	◆研究懇談会の報告	19
◆第 12 期新役員の紹介	3	◆本学会協力・後援事業の報告	21
◆会員からの寄稿	3	◆事務局からのお知らせ	28
◆自著紹介	13	◆編集後記	31

2019 年 7 月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

会長就任にあたって

井口 欣也（古代アメリカ学会第 12 期会長）

第 12 期の会長に就任いたしました井口欣也です。会長に選出されましたことはまったく予想外のことで、報せを聞いて戸惑ったというのが率直なところですが、これから代表幹



事の渡部森哉さんをはじめ役員の方々と協力して学会運営業務や新規企画などに取り組み、学会の発展に微力ながら尽くしていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。また、第 10 期から 11 期に会長を務められた関雄二会員、同代表幹事の坂井正人会員をはじめ、前役員の方々は誠にお疲れ様でした。

関雄二前会長は会長就任時に、明確に 3 つの目標を掲げられました。それは、研究水準の強化と維持、国際化、社会還元と普及・次世代の研究者の育成です。前役員会のご尽力により、これらの目標に関連して多くのことが実現されてきました。私もこの 3 点は、本学会における基本的かつ長期的な目標と位置づけるべきと考えています。したがって、今期役員会としてもこの目標を引き継ぎ、取り組んでまいりたいと思います。

研究については、会誌『古代アメリカ』の編集と発行、研究大会の実施、そして東西両部会の研究懇談会の企画・実施が、学会としての研究活動の 3 本柱をなしています。今期の会誌編集担当には、杓谷茂樹会員（第 11 期から継続）を編集委員長、吉田晃章会員、山本睦会員を同委員として会誌上の企画立案と編集にあたります。また、2011 年に始まった研究懇談会も定着してきており、今年度も、東日本・西日本の各部会幹事である鶴見英成会員、大越翼会員のご尽力により、企画・実施がすでに進行しています（すでに 5 月 18 日に西日本部会研究懇談会、6 月 23 日に東日本部会研究懇談会が実施され、多くの参加者がありました）。その他の研究事業についても、担当役員の伊藤伸幸会員とともに、引き続き会

員の研究発信の場を充実させていく努力をしてまいります。会員の皆様にも積極的な会誌への投稿や、研究イベントへの参加をお願いいたします。本学会の個々の会員の研究は、科研費等外部資金の獲得状況や出版活動をみても大変活発であり、学会としては、そうした会員間の交流、そして同時に会員と非会員の研究交流の場を設定することで、研究をサポートしていきたいと思います。

二つ目の国際化については、関前会長も指摘されていたように、本学会の規模ではできることは限られており、その意味で小さな努力を積み重ねていくしかありません。実際、会員の活動はいまも十二分に国際的ではありますが、学会としては、何らかの方法で、そうした会員の皆様の活動と連携する方法を模索していきたいと考えています。これについては、引き続き役員会で協議をしていきます。

三つ目の社会還元と普及という点は、会員の力を結集して学会全体として取り組むことによって、より大きな成果が期待できる目標であるともいえます。

これまでの取り組みとしても、2008 年以来、高校教科書や教育に関して専門的な見地から改善を働きかけるべくワーキンググループが設置され、メンバーの皆さんのご尽力がありました。2016 年と 2017 年には関連するシンポジウムも企画・実施されています。そして、昨年末に発行された会誌 21 号には、2015 年に発足した「高校教育検討ワーキンググループ」の活動成果が報告されました。そこでも触れられていますが、今後は 2022 年度から始まる「歴史総合」、「世界史探究」の実施動向にも注視が必要です。同時に、初等・中等教育の現場で教育に当たっている教員の方々（本学会会員にもいらっしゃる）とのより密接な連携についても、今後検討すべき課題です。学会としては、これまでのワーキンググループの成果を踏まえ、まずは課題として残っている「授業案の作成と web 公開」などに取り組んでいきたいと思います。

今年度は、研究成果の社会還元に関わる新規事業

として、公開シンポジウム開催のための外部資金獲得に向けた検討ワーキンググループを立ち上げました。来年度の開催に向けて申請をおこない、採択されることを目指したいと考えています。

また、古代アメリカ学会の倫理綱領策定を目指すワーキンググループも発足しました。これは、関前会長からの引き継ぎ事項のひとつでもあります。現在、主要学会の多くにはすでに倫理綱領がありますが、本学会にはまだありません。会員のひとりひとは、国内での研究、そして国外での調査地域や国において求められる社会的責務、倫理上の問題にたいして誠実に応えるため、調査と同じくらいの時間と労力を割いていることと思います。古代アメリカ学会としても、あるべき行動の指針を社会に示すことには大きな意味があると同時に、それは、今日、学術団体が社会から求められている重要な点であるともいえます。

普及と次世代の育成ということにも関連して、学会の会員数の推移について、少し触れておきたいと思います。現在（2019年5月24日現在）、本学会の会員数は152名（うちシニア会員3名、学生会員21名）です。2008年の175名をピークに、その後は年ごとに横ばいと微減を繰り返して現在に至っています。本学会を千人超の会員規模にしようとするのは現実的ではありませんが、今後も古代アメリカ学会の活動を維持・発展させるためには、これ以上の会員数減は避けるとともに、できればもう少し増やしたいところです。もちろん、この点でも会員のひとりひとりが研究成果をあげてその普及に努め、古代アメリカ研究の魅力と重要性を発信し続けることが基本的な方策であることに違いありませんが、学会の広報活動も大切です。広報担当役員の宮野元太郎会員を中心に、学会ウェブサイトの充実や多様な発信方法を検討しているところですが、同時

に、会員のみなさまにも周囲の方への学会の周知宣伝をお願いしたいと思います。研究大会や研究懇談会は、非会員も参加することが可能です。ぜひ関心のありそうな方にお声かけ下さい。

また、『会報』は現在、バックナンバーも含め学会webサイトで公開され広報的な役割も担っています。今期は会報担当役員として小林貴徳会員（第11期からの継続）と千葉裕太会員が、魅力ある紙面作りに取り組んでいます。2017年からは、中高生会員の会費を優遇する「ジュニア会員」の制度も創設されています。まだ適用例はありませんが、今後、次世代の若年層にたいする広報の方法も考えていきたいと思っています。

本学会のはじまりは、1995年に中村誠一会員が発起人の中心となった「新研究会設立委員会」の発足にさかのぼります。そして、翌1996年に大貫良夫会員を会長、中村会員を代表幹事として、本学会の前身となる「古代アメリカ研究会」が、会員数40名でスタートしました。95年の設立委員会の最初の会合で、目指す方向性や会の名称について熱い議論が交わされたこと、そしてその場の高揚した雰囲気は、今も私の中に鮮明な記憶として残っています。その後、2003年に名称を「古代アメリカ学会」と変更して念願の学会として立ち、2007年には日本学術会議協力学術研究団体の指定も受け、現在に至っています。古代アメリカ学会は、ある意味で成熟期に入りつつあるとはいえ、設立当時の高い志と情熱はこれからも会員の皆さんと共有しつつ、さらなる発展を目指していきたいと思っています。今後とも学会の発展のために、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

第 12 期 (2019.1.1~2020.12.31) の役員紹介

先述のように、選挙結果と井口欣也新会長の任命により、第 12 期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会 長	井口 欣也 (埼玉大学)	運営委員	
代表幹事	渡部 森哉 (南山大学)	会 計	浅見 恵理 (埼玉大学非常勤講師)
監査委員	長谷川 悦夫 (埼玉大学等非常勤講師)	編 集	杓谷 茂樹 (公立小松大学)
	芝田 幸一郎 (法政大学)		吉田 晃章 (東海大学)
事務幹事	佐藤 吉文		山本 睦 (山形大学)
	(国立民族学博物館外来研究員)	広 報	宮野 元太郎 (大阪観光大学)
事務幹事補佐	中川 渚	研 究	伊藤 伸幸 (名古屋大学)
	(国立民族学博物館外来研究員)	会 報	小林 貴徳 (関西外国語大学)
			千葉 裕太
			(愛知県立大学客員共同研究員)

会 員 か ら の 寄 稿

●企画展『メキシコ 絵文書に見る古代文明の歴史』を実施して

井上 幸孝 (専修大学文学部)

はじめに

専修大学生田キャンパス (川崎市多摩区) にて、2018 年 11 月 26 日から 12 月 14 日まで企画展「メキシコ 絵文書に見る古代文明の歴史」が開催された。主催は専修大学図書館で、文学部井上ゼミナールと科研費・新学術領域「古代アメリカの比較文明論」(領域代表: 茨城大学・青山和夫先生) の協力によって、図書館本館入口付近の会議室兼展示室を会場として実施した。開場時間は、平日は 12 時から 16 時半まで、土曜日は 10 時から 14 時までで、のべ 705 名に来場いただいた。古代アメリカ学会第 23 回大会の 2 日目 (12 月 2 日) には、学会参加者を対象とした 30 分ほどの見学時間を設けたほか、12 月 13 日には、学内見学者を主な対象として筆者がギャラリートーク (展示解説) を行った。

上記の科研では、筆者は計画研究 A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」(代表: 国立民族学博物館・鈴木紀先生) の分担研究者として、植民地時代の先住民のクロニカ分析を中心に研究を進めた。その一方、国際活動支援班 (代表: 青山和夫先生) にも属し、アス

テカとインカの記録手段についての比較研究も行った。この比較研究においては、アステカ・インカそれぞれの記録手段と征服以降の変容の比較を試みた。こうして、メソアメリカの絵文書に深く関わるテーマを扱ったこともあり、調査研究で得られた知見を展示に活かし、社会への還元の一環とした。



図 1 : 企画展のポスター

展示の概要

周知のとおり、メソアメリカには文字や文書を使用する社会が発達した。文字の起源は紀元前にさかのぼり、ラ・モハーラ（前2世紀）やサン・バルトロ（前1世紀）の石碑や壁画が知られている。絵文書については、遅くとも古典期にはマヤ地域でその使用があったことが確認されている。なかでもマヤ文字は高度に発達したが、後古典期メキシコ中央部やオアハカなどの文字も単なる表意文字ではなく、表音機能も兼ね備えていた。

本企画展では、筆者の専門に近いアステカ王国に焦点をあて、メキシコ中央高原のものを中心にオアハカやゲレロなどアステカ支配域に該当する範囲内の絵文書のファクシミリ版を展示することとした。図書館と筆者の蔵書から展示するものをピックアップし、6つのセクションに振り分けた上で、各セクションの点数のバランスを考慮して展示するものを選定した。メソアメリカについて初めて知るとい見学者が多いことを想定し、6つのセクションの内容をあまり複雑なものにしないよう心がけた。その結果、「地図形式の絵文書」、「テツココ（アコルワカン王国）の絵文書」など不採用にしたセクション案もあった。実際に展示した各セクションと文書は表1の通りである。

本展示の特徴の一つは、とりわけ最後の2つのセクションに歴史的な視点を取り入れた点にあった。5つ目のセクションでは、16世紀のスペイン征服後、フランシスコ会士が作成させた2編の文書のファクシミリ版を展示した。1523年に渡墨したペドロ・デ・ガンテの「絵文書」は、持ち運び可能な小型サイズの絵文書風の本で、布教のためのキリスト教の教えを絵文書の技法を用いて表したものである。また、ベルナルディーノ・デ・サアゲン

編の有名な『フィレンツェ文書』3冊も展示した。なお、この『フィレンツェ文書』のファクシミリ版を所蔵する日本の大学は限られている（専修大学のほか東京大学、関西外国語大学、摂南大学、奈良大学等、おそらくは8大学が所蔵）が、前者のファクシミリ版は、筆者自身も専修大学が保有するもの以外にはこれまでにメキシコの歴史専門の古書店で15年ほど前に一度だけしか目にしたことがない「レア物」である。

6つ目のセクションでは「テチアロヤン絵文書群」に属する文書2点を展示することにした。この絵文書群は植民地時代中葉以降、17～18世紀に作成されたもので、現在ではその多くが「権原証書」の一種と考えられている。「権原証書」は、きわめて植民地時代的な文脈の中で村や共同体の土地境界を明示し、それを維持する目的で作成された文書である。したがって、「テチアロヤン絵文書群」は絵文書伝統の継続というよりは、その伝統を模した植民地時代特有の「古文書風の文書」であったが、今回は村の土地領域に関するもの1点と、町の支配者家系の血統に関するもの1点を展示した。

展示の工夫

今回の展示の企画にあたって最初に考えたのは、「触れられる展示」であった。展示資料の購入額は1点あたり数万～数十万円程度で、専修大学の図書館の分類では許可を得ないと閲覧できない「貴重書」の扱いにはなっていない。個人所蔵のものに至っては、研究遂行上、仔細の検討や内容の分析に使うため、手垢にまみれているものすらある。そこでガラス製の展示ケースで覆うことはせず、どうしても見てもらいたい箇所がある絵文書は開いたページを固定して展示し、それ以外のものは「自由

セクションNo. と名称	展示資料名
(1) 暦と神々	『ブルボン絵文書』 <i>Códice Borbónico</i> 『オバンの暦の書』 <i>Tonalámatl Aubin</i> 『マリアベキ絵文書』 <i>Códice Magliabecchi</i>
(2) 貢納品	『貢納台帳』 <i>Matrícula de Tributos</i> 『フンボルト絵文書』 <i>Códice Humboldt</i> 『コヨアカン納税台帳』 <i>Códice Tributos de Coyoacán</i>
(3) アステカ（メシーカ）人の歴史	『メンドーサ絵文書』 <i>Códice Mendocino</i> 『アスカティトラン絵文書』 <i>Códice Azcatitlan</i> 『ヴァティカンA絵文書』 <i>Códice Vaticano A</i>
(4) ボルジア・グループ	『ボルジア絵文書』 <i>Códice Borgia</i> 『コスビ絵文書』 <i>Códice Cospi</i> 『フェイエルヴァリ=メイヤー絵文書』 <i>Códice Fejérváry-Mayer</i>
(5) スペイン人が16世紀に編纂した文書	ペドロ・デ・ガンテの「絵文書」 <i>Códice pictográfico de Pedro de Gante</i> ベルナルディーノ・デ・サアゲン編 『フィレンツェ文書』 <i>Códice Florentino</i>
(6) テチアロヤン絵文書群	『ガルシア・グラナドス絵文書』 <i>Códice Techialoyan García Granados</i> 『サン・フランシスコ・ショナカトラン絵文書』 <i>Códice Techialoyan de San Francisco Xonacatlán</i>

表1 展示のセクションと絵文書の一覧

に触れてご覧ください」との但し書きをつけて展示した。



図2：展示会場

その一方、6つのセクションの補足として、いくつかの説明項目をピックアップし、大小のパネルで説明を付加した。具体的には、「太陽の石」、「アマーテ」、「260 日暦」、「数字の表記」などで、図と文章での説明の双方を付した。また、図書館側から来場者に現代も含めたメキシコについても関心を持ってもらえる内容がよいとの助言があり、現代メキシコの写真パネルやテレビ画面を用いた写真のスライドショーも準備した。遺跡などの写真のみならず、現代の街並みや食べ物なども見せるようにした。デジタルカメラが普及し始めた頃はあまり意識していなかったが、ある時から街角の風景や日常の食事なども気がついたときにはなるべく写真に収めるようにしており、その結果膨大な量になりつつある筆者個人のデジタル写真アーカイブが役立った。余談ながら、少し前までは、テーブル上の料理にカメラを向けて撮影している筆者の姿は「怪しい人物」に他ならなかっただろうが、近年では SNS の普及によって躊躇なくそうしたことができるようになった。



図3：ギャラリートーク（展示解説）の様子

ところで、実際に展示をしてみて、本来の展示物（絵文書等）のほかに様々な「小道具」が必要だったり有効だったりすることも実感した。20 年以上前にゲレロ州タスコ市内で購入した大判のアマーテ・ペインティング、日本で販売している店があると知り慌てて取り寄せたア

マーテの見本も展示に利用した。また、メシーカ人の歴史に源流があるメキシコ国家紋章を説明するためのメキシコ国旗と、「太陽の石」の説明の場所に展示したレプリカ工芸品は展示の数か月前にメキシコで入手したものであった。同じく受付カウンターで触れられるようにしたのが、遺跡のデザインが含まれる紙幣と「太陽の石」がデザインされている硬貨で、未使用もしくは見た目がきれいなものをとっておいたのが役に立った。

来場者・学生の反応

会場受付は図書館員もしくはゼミ生を中心とする専大生が交代で担当し、来場者にはアンケート用紙を配布した。アンケートの回収率は 57 パーセントで、絵文書の鮮やかな色が来場者の関心を引いたこと、絵文書だけでなくメキシコやメソアメリカに触れられたのがよかったことを示す感想が多く寄せられた。また、受付学生の的確な説明を評価するコメントも見受けられた。その一方で、触れられる資料とそうでない資料の区別がわかりづかった、平日の午前中も開場してもらいたかったなどの要望もあった。

展示会終了後の学生の反応も上々で、絵文書やメソアメリカの文化について知ったことがいい刺激になったと思われる。会期終了直後の 12 月 20 日にはミシュテカの絵文書を専門とする柳澤佐永子氏に井上ゼミで『セルデン絵文書』の読解例を話していただいたが、その際には、ゼミ生から多くの質問も出た。また、筆者が引率を担当した春休みの語学研修（2 月～3 月、イペロアメリカナ大学）では、国立人類学博物館を訪問したのだが、展示中に知った「太陽の石」をはじめとするモニュメントの現物を見て感慨ひとしおの学生も見受けられた。

最後に、本展示がうまくいったのは、図書館スタッフの働きぶりに負うところが大きかった。展示の段取りを知り尽くしていて、有能なプロフェッショナルだからというのはもちろんであるが、何よりも絵文書を見て純粋に関心を抱き、具体的な質問を次々と投げかけていただいた結果、展示がはるかによいものになった。メソアメリカ的感觉で描かれた神々や人物像、動物の姿を「かわいい」、「ステキ」と感じてもらえる人たちとこの展示に取り組めたことは、とても幸運だった。これら図書館スタッフと、展示を手伝ってくれた学生たちに感謝したい。

謝辞：本展示に際して科研費「古代アメリカの比較文明論」（JSPS15K21760）の助成を受けた。記して感謝申し上げる。

●オープンデータ考古学へ向けて

宮野 元太郎（大阪観光大学国際交流学部）

研究データは誰のものか

遺跡は誰のものか？「開かれた研究」をテーマのひとつに掲げるパブリック考古学で扱われる問いでもあるが、外国で調査にあたる考古学者にとっては身近な問いでもある。筆者も、初めてアンデスのフィールドに出た学生の頃から、何度か議論した記憶がある。「外国に乗り込んで遺跡を掘らせて頂くのだから、現地の人々のものとしてリスペクトを払わねばならない」という者もいれば、「文化遺産は人類共通の財産だし、過去に国境はない」という者もいた。ここに世界遺産と観光産業との関係など、遺跡の現代的存在意義なども絡めば、議論はより複雑になる。視点によって答えが異なるが、いずれにせよ考古学者のものでないことは明らかだろう。

では、調査の主体は誰か？科研費を基盤に活動する日本の調査隊に関わる機会を頂くようになってから、先輩たちからよく論されたものである。「税金で研究機会を頂いている以上、フィールドでは1秒、1ソルたりとも疎かにせず、真摯に調査にあたらなければならない。」いうまでもなく、調査はその価値を公に認められてはじめて実施できるものであり、ステークホルダーとして納税者がいることは忘れてはならない。調査を進めるのが研究者だからといって、その主体が考古学者当人であるとは簡単には言えないだろう。

では、研究データは誰のものか？考古学者は答えに窮するのではないだろうか。考古学者たちがフィールドで得る調査データは、そもそも自分の研究テーマに沿って得たものである。それに、発掘調査を伴う考古学のデータ生産のコストは高い。そこで得られるデータはその遺跡固有のものであり、その保有には研究者のキャリアがかかっている。科学への貢献といったところで、一定の研究成果を提示できるまでは占有したいというのが本音ではないだろうか。実際のところ、考古学調査の分野の関連規定や慣例でも、この点は配慮がなされている場合が多い。例えば筆者が調査に当たっているペルーの規定でも、提出した報告

書の公開時期や利用形態について一定の配慮がうかがえる。

しかし、研究者個人のインセンティブを置いて考えたとき、人類共有の財産である考古遺跡から得たデータは、特定の研究者が占有できるものだろうか。そして、ICTの進歩により、データの様々な活用が可能になった現在、考古学研究をより進めていくという目的のためには、それは効率的なことなのだろうか。

オープンサイエンスと考古学

近年、研究をとりまくICTの進歩とあわせて、オープンサイエンスを促進させる動きが加速している。研究成果をオープンにするいわゆるオープンアクセスについてはもちろん、研究データそのものをオープンにしていけるいわゆるオープンデータについても、学術分野によって温度差はあるもののオープン化がなされつつある。また、データベースの構築やweb検索システムも整備されつつあり、研究を取り巻く情報環境は確実に変化している。

では、オープン考古学は現実には可能なのだろうか？一部の研究機関ではすでにデータベースの構築が始められているようだが、そもそも考古学は、研究データをオープンにした場合に生じる研究業績の獲得に与える負の影響と、それに見合ったインセンティブの担保が困難な分野のひとつと言える。しかし同時に、学際化とICT化が急速に進んでいる研究分野という意味では、オープンサイエンスと相性が悪いとは言えないのも事実である。実際にオープン考古学の環境をどのように整備していくべきなのか、オープン・クローズ戦略など早い段階から検討していく必要がある。

オープンサイエンス

ここ20年ほどで、ICTの進歩や研究を取り巻く環境は大きく変化しており、オープンサイエンスはそこから現れた科学の新しいかたちといえよう。研究活動もそこで生産されるデータも、そ

のデジタル化は進んでいる。生産された大量の研究データを転送し保存する技術も進化しており、無限に増化していくとも感じられるデータベースから、必要なデータだけを検索し、瞬時に入手することが可能になっている。そして、デジタル化された研究環境では、研究データを広く共有し活用することが可能となったのである。オープンサイエンスは、この研究データを広くオープンにしていくことで、研究活動を効率化し促進させ、さらには研究分野を超えて多くの人々がデータを活用することでイノベーションも促すことをも期待するのである。

2013年、主要国首脳会議 G8 ロック・アーンサミットではオープンデータ憲章が締結された。これは経済成長を念頭により効率的・実効的な政府やビジネスの構築に助するためのものであった。天然資源や採集産業など、公共に利することが期待できる政府のデータを、国際社会が連携してオープンにしていくことが提起された。この流れは学術研究の分野へも影響をもたらすものであった。

2016年には、G7 茨城・つくば科学技術大臣連合会の共同声明には、「オープンサイエンス・サイエンスの新たな時代の幕開け」が盛り込まれた。ここでは、公的資金による研究成果（データセットを含む）を、学術以外の一般社会に対してもアクセスできるようオープンにしていくことが提起された。さらに、研究者のインセンティブ担保を含むオープンサイエンスの基盤整備の必要性も提起されていた。

そして同年、日本学術会議のオープンサイエンスの取り組みに関する検討委員会から、「オープンイノベーションに資するオープンサイエンスのあり方に関する提言」が公表された。これは諸外国の動向を踏まえて、今後の我が国におけるオープンサイエンスのあり方について「研究データのオープン化」と「データ共有」に着目し、研究データ基盤の整備、さらにはその結果必要となる研究者のキャリア構築のあり方の変化も見据えた提言となっていた。

オープンサイエンスはグローバルな潮流となっており、すでに研究者や研究機関のインセンティブ担保から、情報セキュリティや知的所有権といった様々な基盤整備の段階にきています。

いえよう。

オープンアクセスとオープンデータ

オープンサイエンスの枠組みは、大きく二つに分けられる。一つは学術論文などの研究成果をオープンにする、オープンアクセスと呼ばれるもので、もう一つは研究データそのものをオープン化し広くデータ共有を促していく、オープンデータと呼ばれるものである。これらは、研究データのデジタル化と、それを運用する ICT の進化に呼応して順次拡大している。

オープンアクセスについては、インターネットが普及・定着した 2000 年頃から、各研究機関のリポジトリや各学会 web ページでの公開が進められてきた。古代アメリカ学会でも、2017 年の総会において、web 上での論文等の原則公開が採択され、過去の成果まで遡り公開していく体制が構築されている。また同時に、J-Stage など研究成果のデータベース基盤とポータルサイトの整備も進んできた。

オープンデータについても、大容量のデータ蓄積と転送の技術の進歩に裏付けられ、研究分野によって温度差は大きいものの、次第に広がりつつある。特にライフサイエンスや工学系の分野を中心に、研究活動の効率化や、異分野そして産業界とのシームレスな連携によるイノベーションを見据え、活用され始めている。同時に、データへのアクセスを容易にするための検索システムも、ハーバード大学など大規模な研究機関から構築されてきた。2018 年にはついに Google がデータ検索のための Dataset Search のサービスを開始した。今後、クラウド上でのデータベース構築や検索システムの精度向上が進み、オープンサイエンスがメジャーなものになっていくことが予測される。

オープン考古学

ここで問題となるのが、考古学におけるオープンデータの展開の可能性である。オープンアクセスについては特に障害は考えづらい。最新の研究成果にユビキタスにアクセスできることは研究活動上の大きな利点となっている。ひと昔前なら、研究成果を入手するために地球の裏側の大学を訪ねなければならないこともあった。今ではネッ

トで検索して数秒でダウンロードできるようになり、研究者同士その恩恵に預かっている。しかし、オープンデータについてはどうだろうか。考古学は、研究者個人レベルでのデータ生産のコスト負担が比較的高く、また現状の研究者のキャリア構築モデルを考慮しても、データをオープンにした際の研究者のインセンティブ担保が困難である。この意味では、オープンデータとの相性が良いとは言えない分野とも言えよう。

オープンデータが最初に進められたのは、上記のオープンデータ憲章でも触れられているが、国家レベルで作成されたものであった。例として、考古学者も頻繁に利用するデータソースでもあるが、NOAA（アメリカ海洋大気庁）やNASA（アメリカ航空宇宙局）が挙げられる。NOAAは2019年7月現在、10万件近いデータセットを公開しているほか、人工衛星や海洋調査船から絶え間なく送られてくる、1日20テラバイトを超えるデータをオープンにする、ビッグデータプロジェクトもAmazonやGoogleなどと連携して進行している。またNASAは、地球上全てをカバーする三次元の数値地図を公開しており、研究者であれば無料で利用できるようになっている。これら大規模な公的資金・公的機関により収集・作成・生成されたデータは公共性も需要も高く、その公開はオープンデータの嚆矢ともいえるものである。

では考古学データについてはどうだろうか。発掘調査や最新の測量機材の使用を伴う考古学調査は、人文系の学問の中では、比較的费用がかかる分野である。さらに古代アンデス文明調査のように、日本から遠く離れた国まで旅行する場合には、調査費用はより嵩むこととなる。投入される公的資金の額も小さくはない。しかし同時に、長期間遠い外国で発掘調査にあたる考古学者個人にとっては、労力・時間・個人的な費用負担など様々な面で、データ生産の個人的コストの高い分野でもある。さらに、考古学調査で得られるデータはその遺跡特有のものであり、一度発掘（＝破壊）されてしまえば二度と採集できないデータという性格を持つ。考古学研究の成果は、学術論文で明らかにされた内容にこそあるとはいえ、データの固有性も重要である。さらに、調査と分析に長期間かかる場合もあり、研究の成果発表による業績の蓄積には時間がかかる分野である。これら

の事情から、考古学データは考古学者個人のキャリア形成にとって命綱とも言えるのである。ここで、考古学者が調査で得たデータをオープンにするとなれば、そのインセンティブを担保することは、非常に困難である。この世界でオープンデータを導入するためには、慎重な制度設計が要求される。

しかし同時に、考古学は、二つの面でオープンデータ化により恩恵が大きい分野であるともいえる。ひとつは考古学の調査シーンで急速に進んでいるICT化とデジタルデータの蓄積であり、また研究の細分化により進んでいる考古学研究の学際化である。

近年、考古学調査の現場ではICTの導入が急激に進んでいる。これまでアナログで行われてきた様々な作業がデジタル機器やアプリに置き換えられ、採集されたデータ分析もデジタル処理により行われるシーンが多くなっている。

例えば筆者は、測量と空間分析に携わってきたが、これは考古学調査シーンでもとくにICT化の著しい分野のひとつである。筆者がまだ学生だった1990年代、紙の地図を使い、平板で図面を作成している現場も珍しくはなかった。その後、多くの現場でトータルステーションが導入され、測量データも三次元デジタルで処理されるようになり、数値地図を利用し、GIS上で空間分析がされるようになった。ほんの数年前はまだ珍しかったドローンも、今では多くの現場で当然のように導入され、フォトグラメトリ技術を使ってサイトを三次元モデル化することもとくに珍しくはなくなってきた。今はまだ高価なLiDAR技術も年々小型化低価格化しており、数年の内にはどの現場でも導入されるようになるのだろう。もちろんデジタル化されているのは測量シーンだけではない。実際に土を掘る発掘調査自体はアナログでやるしかないが、記録、分析など様々なシーンでICTが導入され、考古学調査のデータはデジタルで蓄積されている。

今、考古学者たちの研究環境のICT化が進んでいる中、それぞれの研究者のもとに蓄積されたデータがオープン化されれば、考古学研究は一気に効率化されることは想像できる。例えば、特定のデータセットについて分析する場合、限定された少数の研究者だけが分析のではなく、同時に様々

な視点から分析することで異なる解釈を提示できるようになるのである。そして、複数の研究者がそれぞれの分析結果を確認することで、より精度の高い研究も期待できる。

また近年、考古学研究が細分化され、学際的な研究が進められるようになってきた。プロジェクトのテーマに合わせて、建築学や生物学、植物学など、関連する様々な分野の専門家が集まり調査研究が実施される。さらに、それぞれのデータをクラウド上で一元管理することや、国内と現地にいる研究者が同時に一つのデータを分析するなど、学際研究の連携が容易になってきている。

この学際研究についても、オープンデータ化により研究が促進されることが期待できる。それぞれ異なる分野の研究者がデータを自分の分野の研究者にオープンにすることで、様々な知見がフィードバックされることが期待される。また同時に、すでにそれぞれの研究分野がオープンデータ化されていれば、比較研究なども効率的に進めることが可能となる。

考古学研究環境の ITC 化と学際化は、考古学がオープンデータに向いている面があることを示している。考古学がオープンデータ化する際の研究者のインセンティブの担保が困難であるという負の要因と合わせて、その両面を考慮しなければならない。

オープン考古学の準備

2011 年には、カンサらにより SAA ミーティングでの議論を元に編集された「ARCHAEOLOGY 2.0」が出版され、オープン考古学の可能性が論じられた。多様な分野で進められているオープンサイエンスの流れから、考古学も様々なかたちで恩

恵を得ているが、今後は考古学自体もオープンとなっていくことは予測される。現段階で必要なのは、その環境を十分に整備しておくことだろう。

もしオープン考古学を構築するならば、それぞれの研究コミュニティが慎重に環境を整備し、戦略を立てなければならない。研究シーンで使用される様々なデータフォーマットを業界内で統一し、クラウドを利用したデータベースの構築、多言語に対応したアクセスポータルの設定など、オープンデータを前提とした研究環境を整備する必要があるだろう。また、研究者のインセンティブと知的所有権などの条件を設定し、オープンデータが達成される場合に、どのようなデータをオープンにし、どのようなデータをクローズにするのか、またどの順番でオープンにしていくのか、詳細な規定を策定する必要もある。研究者のインセンティブをいかに担保するか、その戦略がなければ研究者の協力は得られないからである。

また、オープン考古学が進められていけば、データ生産者の役割も大きく変わってくる。これまで最終的な研究成果（学術論文）の発表者に集中していた業績評価についても、多くの研究者がオープンに利用するようになれば、データ生産者に対する業績評価も再検討しなければならないだろう。

これらの環境整備については、より効率的な研究を見据えたオープン考古学を目指すためであると捉えるか、抗うことのできない流れへの対策として行うのか、その解釈は研究者によって異なるところかもしれない。何れにせよ、オープン考古学の確立が、より理想的なかたちですすめていけるよう、早い段階で、環境整備と戦略を構築していくことが望まれる。

●初調査から三年を経て

—留学中に感じた現代メキシコと古代文明についての所感—

荒木 昂大（東北大学大学院文学研究科博士課程後期）

2016年の夏、メキシコで初めての発掘調査を経験してから3年弱が経った。私は今、「日墨グローバルパートナーシップ研修計画」の奨学生の一員として今年2019年の8月までメキシコでスペイン語を中心に勉強している。本コラムでは、本会報41号の「フィールド調査体験記」に寄稿した当時では感じ取れなかった事柄について主観的に述べたいと思う。

メキシコに居てよく驚かされることと言えば自国の古代文明や遺跡に対する関心の高さである。メキシコは古代文明を自国のアイデンティティの拠り所の一つとして丁重に取り扱っていることは初めて来た時にも感じたが、考古学とは少し離れた環境に身を置いていても、毎日のように古代文明と関係のある事物を目にする。代表的なところでは、国旗や硬貨などに先スペイン期の意匠が施されており国のシンボルとして扱われていることが挙げられる。また、現在通っているメキシコ国立自治大学の外国人向けスペイン語学校であるCEPEの教科書のテーマにはメキシコの遺跡や古代文化に関するものがよく取り上げられており、「外国人にアピールしたいメキシコ」として古代文明があることが分かる。私がメキシコ考古学について勉強していると言うと、多くのメキシコ人が興味を持ってくれることもまた、関心の高さの顕れであろう。



図1 語学学校の教科書で取り上げられるメキシコの古代遺跡

一方で、外国人である私とその国の歴史にかかわる

ことの難しさを感じたこともあった。私がこちらで知り合った方に自分の専門を交えて自己紹介していた時であるが、話の中でその方がやや不快にいられたように見受けられたことがあった。もしかしたら自国のことについては、外国人よりも私たちの方が詳しいという自信があったのかもしれない。これまで日本を離れて活躍する多くの研究者から、外国人として現地に溶け込み研究することの難しさを聞き、私も頭の中では理解していたつもりだった。しかし、この実体験は自分の理解が未だ不十分であったことを再認識させてくれた。現地の方に受け入れられるような研究者になるためにはどうすればいいか、常に自身の言動を省みる必要があるだろう。

メキシコには多様な先住民がおり、古代文明の数々と彼ら先住民との関わりがよく論じられるのもメキシコの古代史のユニークなポイントである。オアハカ州モンテ・アルバン遺跡を訪れた際は、土産物売りの年配の方が、商品を売るのもそっちのけで外国人である私に遺跡について解説してくれた。その方は自分をメキシコ人ではなく、スペイン人とサポテカ人の混血だと紹介した。サポテカ人はオアハカの先住民の一つでモンテ・アルバンを作ったとされる民族である。自分のルーツを先住民と古代遺跡に関係づけている人々は他にもたくさんいるだろう。

一方で、自身のルーツの中に先住民との繋がりをあまり意識していない人々、特に私が生活している首都メキシコシティで知り合う人々の中には、一部ではあるが、先住民についての諸問題をやや他人事のようにとらえている方も見受けられた。そうした方たちにとっては、先住民と密接に関係していると考えられている古代文明も同様に関心の薄いものである。わずかではあるが、古代文明は先住民のものであり、ルーツの異なる人々が作ったものなので、自分には関係ないし関心がないという意見の方とも話したことがある。また、語学学校の教科書の記載などでは、テオティワカンやアステカのような首都に近い文明・遺跡は国の歴史として扱うのに対し、サポテカやマヤ等は地方の観光地として扱い、

国の歴史の大筋からは若干切り離して考えられているようにも見受けられた。もちろん自国の歴史について全て網羅するのは単なる語学学校の教科書として現実的ではない。しかし取り上げるのならば同じ古代文明として、観光地ではなくメキシコという国の歴史の一部を構成する要素として紹介しても、メキシコ古代史の多様性という側面を知ることができて面白いのではないかと感じた。

自身のルーツの中に先住民との繋がり意識をあまり持っていない人々にとって、古代文明とは自分たちとは異なる集団である先住民が作るもの、という意識があるのかもしれない。

さて、先ほどモンテ・アルバン遺跡に訪れた話を少ししたが、語学学校の学期の合間に設けられる 1、2 週間の休みを利用して様々な遺跡に訪れている。2016 年に、初めてこちらに来た時も、半月ほどかけてメキシコの遺跡巡りをしていたが、その時に訪れることができたのは、例えばテオティワカンやチチェン・イツァのような、世界遺産の有名遺跡ばかりだった。今回の留学では時間的に余裕があるので、もう少し訪れる遺跡の範囲を広げて、観光客があまり訪れないような遺跡を（といってもメキシコ考古学を知る者にとっては有名な遺跡を）訪れている。そこで改めて驚くのは、非常に多くの遺跡がメキシコ政府によって遺跡公園にされ、十分な職員によって管理および保存されているということである。例えばカカシュトラ遺跡は遺跡全体に大きな金属製の屋根が取り付けられており、保護の規模に舌を巻いた。メキシコは古代文明を自国のアイデンティティの拠り所の一つとして丁重に取り扱っているが、多くの遺跡公園の管理という側面からもその志が見て取れるだろう。

一方で、そうした政府の活動と、地元の一般住民の認識にやや差があるように感じる事例もあった。プエブラ州の南東に所在するテワカン遺跡に訪れた時のことである。この遺跡はテワカン市から車で 15 分ほどの距離にあり、テワカン市の規模の大きさから考えても比較的アクセスのしやすい遺跡であった。しかし、遺跡を訪れようという観光客が少ないためなのか、ホテルの従業員もタクシーの運転手も誰もテワカン遺跡の場所と行き方を知らず驚いた。結局運転手に、自分がグーグルマップを見ながらナビゲートすることで、遺跡に辿り着くことができた。そして、町の人々の周知レベルに比べて、想像以上に

立派な遺跡附属博物館を持ち、遺跡公園内もよく整備されていたことにまたしても驚いた。聞くと 2017 年に新造されたというこの博物館は、展示の規模も充実しており、5 台ほどの液晶モニターにそれぞれ別の遺跡を紹介するオリジナル映像が流れていた。テワカン遺跡はこの地の文化財教育のために非常に有益だと思えるだけに、未だに地元の人々の中に知れ渡っていないのは非常にもったいなく感じた。



図 2 テワカン遺跡附属博物館

一方で活用よりもまず保護を優先しなくてはならない事情を伺い知れるような遺跡もいくつか見受けられた。オアハカ州のサン・ホセ・モゴート遺跡は、遺跡公園として管理されておらず、村の中にいくらかの古代の建造物が立ち並んでいるだけであった。誰でもいつでも訪れることができるため、ごみが散乱し建造物に落書きがされていた。歴史的に大変重要な遺跡であるため、テワカン遺跡のように綺麗に管理されてほしいと感じた。



図 3 サン・ホセ・モゴート遺跡にあった落書きの跡

古代遺跡は文化財として保護されるが、同時に観光資源でもある。観光客の多いユカタン半島北部における二つの世界遺産遺跡、ウシュマルとチチェ

ン・イツァは 2019 年より入場料が大幅に値上げした。ウシュマルが 1 人 413 ペソ、チチェン・イツァが 1 人 481 ペソである。これは外国人だけの値段で、メキシコ国民やユカタン州民はより低い入場料で入ることができる。ユカタン半島の遺跡は特に観光地として強く意識されているようである。2018 年末より就任したメキシコ新大統領アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドールはこのユカタン半島周辺のマヤ地域を結ぶ鉄道建設計画を打ち出した。これらはメキシコの持つマヤの世界遺産を結び、観光がしやすくなるというものである。私はこの話を聞いたとき、新大統領が遺跡を観光資源として活用することに注力しすぎてしまわないか不安になった。古代文明とは世界遺産になるような立派な遺跡だけではなく、周辺の小規模な遺跡も含めて構成されるものである。鉄道の建設とそれによってもたらされる観光客により、貴重な遺跡の保全に悪影響が出ないことを願っている。

しかし、マヤ鉄道によって大きく恩恵を受ける人々がいるのもまた事実である。私はユカタン半島の内陸にあるシュプヒルという町に旅行して、このことを肌で感じた。ここは世界遺産遺跡でもあるカラクムルを筆頭に様々なマヤ遺跡を訪れるための拠点となる町なのだが、北部と異なりこの辺りにはほとんど観光客は訪れない。私はセマナサンタ休暇で訪れたのだが、観光シーズンの時期でもカラクムルに訪れている観光客はざっと見ても 30 人かそれ以下だった。旅行中、ガイドの方やホテルの従業員と仲良くなれたが、彼らも観光業で潤っている様子ではなかった。ガイドは周辺の村々も非常に貧しいと教えてくれた。そんな彼らの希望は新大統領、そして特に観光業の人にとってはマヤ鉄道であるらしい。マヤ鉄道の計画では、路線はこのシュプヒルのあたりも通る。カンクンなどから訪れやすくなり、観光客も一気に増えるだろう。シュプヒルの人々はこの地の観光資源でもある遺跡と自然を非常に大切にしており、彼らの生活が少しでも豊かになるのであれ

ばと、これまで批判的にとらえていたマヤ鉄道への考え方が少し変わった。



図 4 シュプヒルの町中にある遺跡。
街中にあっても綺麗に保護されており、
文化財に対する現地人の姿勢が見て取れる。

古代遺跡を観光地としてのみ扱う考え方には私は反対である。しかし先住民と古代遺跡を紐づけて考えるメキシコでは、その先住民の貧困や社会的地位の低さが問題となっている。古代遺跡で有名なオアハカ州とチアパス州は、先住民が多くメキシコの中で特に貧しい州としても有名である。メキシコの古代遺跡を取り巻く環境は一言で簡単にまとめられるものではない。

留学中に感じた物事を思いつくままに書き連ねたせいで、なんともまとまりにかけない文章になってしまった。そして各々の事例は私が個人的に経験したもののなので、十分に検証されたデータではないし主観が多分に含まれている。より詳しい見解をお持ちの方ばかりだと思うので何かの機会にご教授いただけたら幸いである。文章中では、ネガティブに捉えられるような事例も取り上げてしまったが、それらはほんの一部であり、現代メキシコの自国の歴史への関心と保存意識の高さに私は常に驚かされ、尊敬の念を抱いている。私にとってメキシコは知れば知るほど興味深いフィールドである。どのようにすれば、古代文明と遺跡が現代社会により良い形で関わられるのか、常に試行錯誤していきたい。

●『アンデス古代の探求—日本人研究者が行く最前線』

(大貫良夫・希有の会編・聞き手 清岡央、中央公論新社、2018年5月刊、1800円＋税)

大貫 良夫 (野外民族博物館リトルワールド)

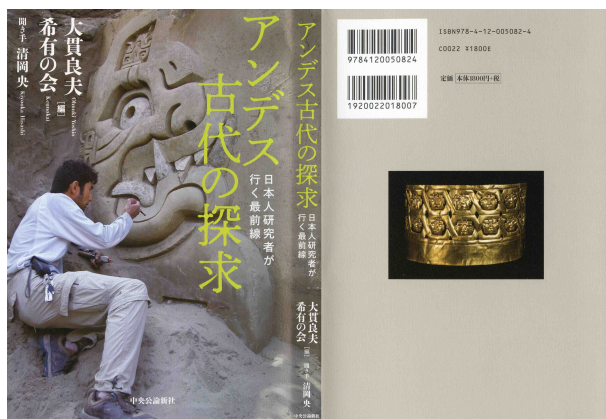


写真1 表紙と裏表紙

ここに紹介するのは私大貫の自著ではない。表題にあるようにインタビューを通して研究者から聞き取って書物として編集したものである。編集者として名前を出した責任があるので、あえて紹介の務めを果たそうと思う。

アンデス考古学研究の嚆矢となったのが 1958 年に始まった東京大学アンデス地帯学術調査団である。以来、アンデスに向かう日本人研究者が考古学のみならず民族学歴史学その他の分野でも輩出するようになった。その始まりから 60 年を経た現在、アンデス考古学ではどのような成果がありどのような展開がなされているのか、これからの課題は何か、何人かの研究者にそれを語ってもらってできたのが本書である。

その構成は以下の通り。

- 序文 佐藤 謙 刊行に寄せて
- 第1章 大貫良夫 アンデス考古学の 60 年
- 第2章 鶴見英成 コトシュ遺跡—文明の起源を推理する楽しみ
- 第3章 井口欣也 クントウル・ワシ遺跡—住民と共有した発掘と博物館の経験
- 第4章 関 雄二 パコパンパ遺跡—権力発生のプロセスを求めて
- 第5章 芝田幸一郎 ワカ・パルティエダ遺跡—

壁画で覆われた彩色神殿の発見

- 第6章 松本雄一 カンパナユック・ルミ遺跡—周縁から見たアンデス文明の形成
- 第7章 坂井正人 ナスカの地上絵—分布調査、遺跡の保護と保存
- 第8章 渡部森哉 タンタリカ遺跡—北のマチュピチュ

第1章ではコトシュの発掘からクントウル・ワシ遺跡の発掘そして博物館建設のいきさつを大貫良夫の話からまとめている。とくにアンデス研究がどうして始まったのか説明する必要があるがこの種の本では不可欠であるから、関連する研究者の名前も出した。すなわち江上波夫、石田英一郎、泉靖一、今西錦司、さらには梅棹忠夫などである。これらの研究者は皆、朝鮮半島から満州、中国で終戦を迎えている。戦後の日本を狭く感じ、大陸への飛翔を思う気持ちが人一倍強かったのかもしれない。そしてある種の偶然の契機からアンデス研究が具体化するのであるが、本格的な発掘を始めたコトシュ遺跡で、第1回目から大きな発見があったことは幸運でもあり、その後の研究方向を決める重要な成果でもあった。とくにアンデス文明の母文化とされていたチャビン文化に先立つ 1500 年もの間に、予想もしない文化の交代の歴史があり、なかでも最古の時期に立派な石造建築の神殿があったということを明らかにしたのである。以後の研究と調査はチャビン以前の歴史と早期の神殿の意義を主要課題として進むことになった。

コトシュに端を発した先土器時代(形成期早期)の神殿をめぐるその後諸研究が進む。そうした中で北海岸に流れを注ぐヘケテペケ川の中流部で徹底的な表面調査と綿密な発掘を繰り返して文明起源の課題に取り組んだのが鶴見英成で、第2章でその成果が語られる。さらに鶴見は形成期早期神殿の成果からコトシュの見直しを始めようとしている。50 年余りも昔の調査では見落とされた点が多々ある。新しい技術によって年代その他データの内容も豊かに

なる。これからの成果への期待は大である。

第3章では井口欣也がクントゥル・ワシの発掘、黄金墓の発見、博物館建設、修復保存事業のあらましにとどまらず、地元の農民との交流について語る。このような地元住民やそれを取り巻くやや大きな社会との関係を維持し、調査成果の地元社会への還元という点で日本のアンデス調査はユニークである。

現地に博物館を作って村人に管理運営を任せた経緯についてはこの章で説明がある。しかしながら経済的にも専門的にも外部の支援がなければ立ち行かないことは明らかである。幸い事情を知っての有志が支援の会「希有の会」を作り、財政支援を始めた。本書は支援活動の一環にもなればという意図もあって編集にその名を連ね、会長の佐藤謙氏が序文を寄せた次第である。

1960年代のコトシュ調査の後、大きな研究上の展開は1979年北高地カハマルカ市にあるワカロマ遺跡の発掘から始まる。第4章の語り手の関雄二のアンデス調査もここに始まる。ワカロマの発掘では形成期前期中期の神殿建築の重なり過程が明らかになるにつれ、コトシュが想起され、いわゆる神殿更新説の提唱につながった。関の関心はワカロマでの事件から生まれた遺跡と住民の関係に向かう。そしてクントゥル・ワシよりさらに北に位置するパコバンパ発掘を手がける。ここでも黄金墓が見つかり、遺跡や文化財保護と住民との関係が課題となり、クントゥル・ワシとは少し違う形での博物館設立の方向が模索される。

1960年以来、日本人研究者はペルーの北高地で調査と研究を重ねてきたが、アンデス文明の歴史は海岸地方を抜きにしては語れない。高地と海岸両方の形成期研究が必要である。このような使命感のもと坂井正人と芝田幸一郎はヘケテペケ川下流のリモンカルロを発掘した。その成果をもとに芝田は中央海岸のネパーニャ谷に向かい、セロ・ブランコに続きワカ・パルティエダを発掘する。そして大きなジャガー顔の人物レリーフを発見する。この神殿は年代的にも様式的にもチャビンより古い。折しも中央海岸にはそうした大神殿が数多くあって独自の文化を確立していたという見解が出てきており、芝田の調査成果は今後の形成期研究に貴重な貢献をすることになる。そのことを語るのが第5章である。

第6章の松本雄一は中部高地で新たな神殿遺跡を発見する。カンパナユック・ルミである。建築や土

器は明らかにチャビンと関係があることを示しているが、黒曜石その他貴重な遺物が出土した。また神殿周囲には居住遺跡があるようで、その広がりには12ヘクタールにも及ぶらしい。この遺跡と北高地や海岸で見つかった同時代そしてその前後の神殿遺跡との関係はどうか、直ちに外向いて発掘区域を広げたいという思いである。

第7章は坂井正人がナスカの地上絵調査といくつもの新発見を紹介する。坂井はクントゥル・ワシ、チャンチャン、リモンカルロの発掘を通して景観考古学といえる分野に関心を広げ、最近ではナスカ研究に専念する。そしてその成果が山形大学を動かしてついにナスカの町に山形大学の研究所を開設させた。常時日本人研究者が滞在して調査と研究を進めるかたわら、ペルー人も含めた大学院生の教育も行う。こうしてアンデス古代の研究領域は広がりかつペルー人研究者の養成にも貢献しながら新たな展開を見せている。

第8章はそうした展開のもう一つの例である。渡部森哉もインカ帝国への興味を持ちつつ形成期研究から出発し、それ以後の時代へと関心を移してゆく。そしてサンタ・デリア、タンタリカ、パレド・ネス、エル・パラシオと精力的に発掘を実施し、至る所で新発見を重ねてきた。建築、墓、土器などにそれまでにない新しい事実が出てくる様子はじつに壮観である。

こうして形成期研究から始まったアンデス古代の探求は、始まりから終わりのインカ帝国までの5千年に及ぶ長大な歴史の解明へと広がってゆこうとしている。本書に漏れた山本睦の北ペルーのインガタンボ発掘も重要な形成期研究の成果であり、土井正樹、佐藤吉文の中部高地や南部高地の調査もまた新しい展開である。これらの語りを掲載できなかったことが悔やまれるが、別の機会を待ちたい。

本書と最後に名前を挙げた研究者たちは、毎年どこかで国際会議やシンポジウムそして出版物に名を連ねてきている。日本のアンデス研究はいまや世界の研究者に伍しているだけでなく最前線に立っている。端緒を開いた泉靖一、寺田和夫両先生の想像と期待をはるかに超えるに至ったと言っても過言ではあるまい。

●『世界のピラミッド大事典』

(大城道則・青山和夫・関雄二、柊風舎、2018年12月刊、15000円＋税)

青山 和夫（茨城大学）



写真1 表紙と裏表紙

本書は、日本で初めての世界のピラミッドに関する事典である。639 ページの中に、アフリカ大陸のピラミッド（大城道則）、メソアメリカのピラミッド（青山和夫）、南米のピラミッド（関雄二）、その他の地域のピラミッド（大城道則）に関する詳細な情報がちりばめられている。私がこれまでに刊行した21冊の本の中で最も分厚く最も高価な本である。

それは2017年9月のことであった。エジプト考古学の大城道則先生から私の研究室に電話がかかってきた。「世界のピラミッド大事典を2018年に出したいのだが、アメリカ大陸のピラミッドについて執筆してもらえませんか」という打診であった。大城先生には、大城道則編著『図説古代文字入門』（河出書房、2018年5月刊行）で「マヤ文字—マヤ文明」を分担執筆させてもらっていた。

よくよく聞くと、柊風舎の依頼では大城先生が世界各地のピラミッドを全部一人で執筆することになっていたそうである。私のメソアメリカやマヤ文明の本を参考にして執筆を試みたが、「無理だということがよくわかった」とのことであった。これは逆に私がエジプトや旧大陸の他のピラミッドについて執筆するような無謀な冒険といえよう。

私は南米については関先生に依頼するという条件で北中米のピラミッドについて執筆することを快諾した。関先生が民博副館長を務められ、極めて多忙であることは百も承知であった。しかし関先生は、私の要望に応じてくださった。問題は原稿締め切り

が2017年12月末であるということだった。私は「いつもの調子で書けば大丈夫だろう」と思い込んでいたのであるが、実際に原稿を書き始めると膨大な量の英語やスペイン語の最新の本や論文に目を通さなければならなかった。大変自分の勉強になり、嬉々として原稿を書いていたのだが、「いつもの調子」のように原稿がなかなか進まない。

2017年12月になると案の定、大城先生から原稿締め切りを2月末まで延ばしてもらうように柊風舎に頼んでもらうことになった。「日本で初めての大きな仕事なので万全を期すべきだから」である。ところが、2月末になっても3人とも脱稿できなかった。結局のところ、私が初稿を脱稿したのは2018年3月末であった。それでも3人の中では一番乗りであった。何が言いたいかというと、本書はこれまでに私が執筆した本の中で最も苦勞した本だということである。

さて本書では、紙数・字数に制限はあるが、そして地域によっても数や規模に偏りはあるものの、可能な限り網羅的に世界各地のピラミッドを取り上げた。「はじめに」（計7ページ）に書かれているように、通常「ピラミッド」とは古代エジプトのもの、特にギザの大ピラミッドを指すことが多い。最古のピラミッドはエジプトのサッカラに、最大のピラミッドはギザに建てられた。本書は、古代エジプト考古学者に、メソアメリカ考古学者とアンデス考古学者が加わることによって日本におけるこれまでのピラミッド学の枠組みを超えようとするものである。

本書は、ピラミッドという地球規模の壮大なテーマを扱う。ピラミッドに関する議論のスタートが本書から切られた。その情報と知識の源こそが本書『世界のピラミッド大事典』なのである。ピラミッドを理解するためには、これまでと異なる視点が求められるべきであろう。

ピラミッドは多くの学問的な謎に包まれている。大城によれば、「エジプトのピラミッドがどのように造られたのか」について様々な学説が唱えられてきたが、定説はない。ピラミッドに関する情報がピラ

ミッドの建造に携わっていた数少ない人々から容易に漏れることがなかったからである。古代エジプトの人々は、数千年もの間、建造技術の秘密を守り通し、たった一枚の設計図すら後世に残さなかった。

本書の目的は大きく二つある。一つは最古のピラミッドを含む古代エジプトのピラミッドの学問的な謎を解くためのヒントを得ること、もう一つは世界中に点在するピラミッドから人類の普遍的な嗜好と英知を知ることである。本書では、時間と空間を越えて世界各地のピラミッドを取り上げた。四角錐あるいはそれに近い外観だけではピラミッドとは見えないが、人間が造った人工的な建造物は可能な限りピラミッドに含めた。

アフリカ大陸のピラミッド(計 207 ページ)では、概説に加えて、計 61 のピラミッドを解説する。ピラミッドはアフリカ大陸で誕生した。大城は、エジプトのピラミッドが墓であることは間違いないが、「なぜ古代エジプト人が巨大な四角錐の石造建造物を墓としたのか」についてはわからないという。

ナイル川西岸には 100 基近くのピラミッドが建造された。ナイル川を南方に遡ったスーダンには、その倍以上のピラミッドがある。さらにエジプトの西のリビアにも数百基の小型ピラミッドがあり、モーリシャス島やカナリア諸島でもピラミッドが建てられた。スーダンやリビアのピラミッドは、明らかにエジプトの影響であるという。

メソアメリカのピラミッド(計 244 ページ)では、概説に加えて、計 60 のピラミッドを厳選した。アメリカ合衆国については紙面の都合上、北米最大の土製マウンドを有し、私が訪問したこともあるユネスコ世界遺産カホキア遺跡に絞った。メキシコと中央アメリカ諸国の遺跡については、ユネスコ世界遺産の遺跡や遺跡公園として公開されている遺跡を中心に執筆した。

メソアメリカのピラミッドは主に宗教儀礼を執行する神殿であった。神殿と王宮の両方を兼ねるピラミッドも存在した。神殿の多くはピラミッド状基壇の上に配置され、神殿ピラミッドを構成した。ピラミッド状基壇の側面は複数の段をなし、一つ以上の側面に階段を有する階段ピラミッドであった。

神殿ピラミッドは支配者がまつりごとを行う舞台

であり、古典期マヤ文明では王権を象徴する政治的道具であった。古典期マヤ文明の多くの神殿ピラミッドは、王や王家の重要人物を葬り祀る巨大な記念碑的建造物つまり王陵としても機能した。

南米のピラミッド(計 116 ページ)では、概説に加えて計 40 のピラミッドについて詳述する。メソアメリカやアンデスでは、エジプトのような先端の尖った四角錐の建造物はなかった。アンデスでは、石や日干しレンガを積み上げた壁を支えとする基壇が目立つ。関は、こうした基壇状建造物をピラミッドの仲間ととらえて紹介する。

アンデスでは、エジプトやメソアメリカと比べて、高さはそれほど求められなかった。大きな基壇の上に小型の基壇を建設し、階段状に高さをもたせる建物も多い。一般的に高さに比べて頂上部の面積が広いものが多く、上部空間で儀礼を行うのが目的であった。基壇状建造物は、アンデス北高地や北海岸に集中し、形成期から地方発展期のものが目立つ。

その他の地域のピラミッド(計 29 ページ)では、ギリシア、イタリア、フランス、イギリス、フランス領ポリネシアのモーレア島、トンガ王国、モルデュー共和国、高句麗の將軍塚、岡山県の熊山遺跡の階段ピラミッド、奈良・明日香村の都塚古墳など計 15 のピラミッド状建造物が含まれる。

ちなみに表紙のメインの写真は、私が撮影したメキシコのカンペチェ州にあるマヤ文明のエツナ遺跡の「5 層のピラミッド」である。エジプト文明の大ピラミッドを抑えて、マヤ文明のピラミッドの写真が選ばれたのは、古代アメリカ学会の小さな「勝利」といえるかもしれない。

この写真は、私が日本学術振興会の特定国派遣研究者として、カンペチェ州立自治大学の客員教授として 2004 年 4 月から 1 年間研究に従事した時に撮影した。家族と共にカンペチェ市に住み、日曜日にエツナ遺跡まで愛車のフォード車でドライブに行った。次女美智子は、愛犬メロディー(メキシコ産トイプードル)と遺跡を駆け回っていた。エツナ遺跡の写真を凝視すると、ピラミッドの基部には、愛する妻ビルマと当時中学生で 2018 年に結婚した長女さくらが写っている。青山家の大きな勝利である。

●『テオティワカン「神々の都」の誕生と衰退-』

(雄山閣、2019年4月刊、2600円＋税)

嘉幡 茂 (ラス・アメリカス・プエブラ大学／准教授、京都外国語大学・立命館大学／客員研究員)



写真1 表紙

本書の目次

はじめに

第一章 古代メソアメリカ文明を理解するために

第二章 「神々の都」テオティワカンとは

第三章 テオティワカン衰退後の世界：続古典期

第四章 理論研究：メキシコ中央高原における交易モデルの復元

第五章 実践研究：黒曜石から見た交易システムの復元

第六章 実践研究：搬入土器から見た交易システムの復元

第七章 なぜテオティワカンは衰退したのか

あとがき

現在の考古学研究は、「(中略)なぜ人々がそのような行動パターンをとったのか、そして人々の生活様式や物質文化が、いかにしてそのような形を取るようになったのか(中略)」(レンフルー／バーン 2007、17 頁)について考察することが、重要な課題となっている。

本書は、この「いかにしてそのような形を取るようになったのか」を重視して、テオティワカン(前 150～後 550/600 年)の誕生と衰退について議論している。この解明に向かうにあたり、二つの重要な前提を理解することから始めた。一つ目は世界観であり、二つ目は古代遺産の政治利用で

ある(第一章)。これらの前提を把握せずには、本書のテーマについて、より大局的に考察することは困難であると考えたからである。

第一章は以下のように始まる(15～16 頁)。

まず図1の絵文書をよく見ていただきたい。男性と男の子が何をし、その右下に描かれているものの正体(図1のCとD)について考えてほしい。古代メソアメリカに生きた人々の世界観を知る一助になると思うからである。以下のように四つの選択肢を挙げた。この中から正しいと考えるものを選んでもらいたい。



図1 アステカ社会の文化や習俗について編集された『メンドーサ絵文書』の一場面(A:男の子の年齢を表す; B:十一歳の子供が食べることのできるトルティージャの量(1枚半); C:煙; D:唐辛子。Berdan and Anawalt 1997, FOLIO 60r から抜粋・加筆)

選択肢

- ① 人身御供の場面である。(略)
- ② 男性に抱えられた男の子は何か悪いことをしたため折檻されている。(略)
- ③ 男の子に折檻をしているように見えるが、その対象は彼ではない。男の子に憑依した悪霊退治の場面である。(略)
- ④ 男性は呪術師である。男の子(十一歳)の目には疾患があるため、唐辛子の煙でわざと涙を流させ、治療を行っている。(略)

古代史を深く考察するには、何よりも、私たちと古代人の世界観の違いを知る必要がある。人間

は各時代や各地域で共有される世界観に縛られ生きている。そのため、現代社会で観察される行動や欲求を、無批判に古代社会の事例に当てはめることはできない。

これに関連して興味深い風習がある。古代メソアメリカ文明では、骨が柔らかい乳幼児期に、額と後頭部を板などではさみ、形を細長く矯正する頭蓋変形が実践されていた。トウモロコシから人が誕生したと信じた古代人は、この子実の形に近付けることによって、さらなる超自然の力を得ようと欲したからだと解釈されている。しかしこれは、一側面を言い表しているに過ぎない。深い意味が隠されている。本書で確認してもらいたい。

古代メソアメリカ文明の中で、テオティワカンとは特別な存在として位置付けられている。それは、メソアメリカの各地域でこの国家と関係する物質文化の影響が色濃く認められるからである。さらに、特に芸術・建築様式は、この国家が衰退した後も影響力は消滅せず、トルテカ王国（後 900～1150 年）やアステカ王国（後 1325～1521 年）といった、古代メソアメリカ文明を代表とする王国においても継承された。

これは、後の王国がテオティワカンの栄光を利用し、ここに出自を求めることで権力の正当性を喧伝したからである。さらに、現代メキシコにおいても、テオティワカンという文化遺産は、ナショナリズムの高揚やツーリズムの促進に大きな貢献を果たしている（第一章五節）。

このように、テオティワカンという古代国家はその崩壊をもって当時の社会的な役割を終えたが、現代社会の中で、学問的な価値は言うに及ばず、政治的・経済的に力強く生き続けている。

一方で、現代メキシコにおけるこのような社会的重要性が、歴史学的にも人類学的にもバイアスの掛かった学術的評価を生み出している。本書では、このバイアスを「テオティワカン中心史観」と呼んでいる。

この二つの前提を明確にした後、議論を進めた。

従来、テオティワカンの誕生は、後一世紀から三世紀に起こった火山噴火と関連付けられてきた。しかし、この自然災害は、単に、先行社会を解体させ、テオティワカンにおける国家の樹立によって社会が安定したのではない。

社会変動の中で、パラダイム・シフトが起こっ

ていたことを忘れてはならない。火山の噴火によって引き起こされた社会的混乱を契機とし、かつて信じられていた価値体系は刷新されねばならなかった。

つまり、この動きはテオティワカンにおいてのみ起こったのではない。メキシコ中央高原の他の拠点でも同様の現象が認められるのだ。テオティワカンが一番成功した例として理解できる。しかし、唯一無二ではなく、複数存在していた都市の中から台頭していったテオティワカン、との枠組みを設定することで、メキシコ中央高原における社会変動の実像がより明確に見えてくる。

他方テオティワカンの衰退に関しても、この時期にパラダイム・シフトが起こっていたことを指摘した。古典期（後200～後550/600年）を牽引したテオティワカンが、時代の社会的役割に対応することが困難になったためであると結論付けた。

このパラダイム・シフトの一因として、当時はマヤ低地が先進地帯であり、ここからの革新的な思想の伝播が関与したと指摘した。これを議論するために、続古典期（後550/600年～900年）で流行した「折衷主義」を取り上げた（第七章）。

筆者は、テオティワカンのみならず、メキシコ中央高原の都市が盛衰した理由は、時の支配者が変化していく世界観に対応できたかどうかがキーポイントになったと考えている。

異世界に住む神々や精霊とはどのような存在であるのか、またどのような方法で彼らと交信するのか、そして、どのように人々を導くのかについて沈思し実行したかどうかである。

社会組織と世界観は互いに影響し合いながら変化する。これらの均衡と不均衡が、古代の国家や都市の盛衰を左右したと筆者は考えている。

本書は挑戦的である。

上梓することが出来た理由を「あとがき」で述べた。最後には、話のオチも付けた（176 頁）。楽しんでもらえれば幸いである。

引用文献

コリン・レンフルー／ポール・バーン 2007 『考古学 ―理論・方法・実践―』 東洋書林。

Berdan, Frances F., and Patricia Rieff Anawalt 1997 *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley.

研究懇談会の報告

●第10回東日本部会研究懇談会『ピラミッド・儀礼・神殿・祭祀』

第10回東日本部会研究懇談会は、研究大会の前週にあたる平成30年11月25日（日）、東京大学本郷キャンパス総合研究博物館7階ミュージズホールにて開催された。忙しい時期にもかかわらず会員16名と非会員6名の計22名の参加があった。

今回の研究懇談会は「ピラミッド・儀礼・神殿・祭祀」と題し、公共建築の成立、維持、放棄にかかわる活動やプロセスに焦点を当てた調査と試論の報告となった。

一つ目の発表は、在メキシコ研究者の黒崎充氏（ベラクルス州立大学）による「メキシコ湾岸部ベラクルス州中部地方南地域のホヤ遺跡における古典期後期のピラミッド建設後の儀礼について」であった。報告では、ピラミッド建設前後の時期に相当する一括遺物が報告され、ピラミッド建設時や放棄時におこなわれた儀礼についての論考が示された。また、メキシコにおける緊急発掘の実態や、土製建築物の保存方法、ユーゴの分布域など話題は多岐にわたった。コメンテーターをお願いした松本剛会員（山形大学）からは、儀礼の分類に縛られることなく、コンテクストを精緻に観察することの重要性が指摘された。

二つ目の発表は鶴見英成会員（東京大学総合研究博物館）による「アンデス文明の最初期の神殿について：その成立過程と性格に関する試論」であった。コメンテーターは関雄二会員（国立民族学博物館）をお願いした。鶴見会員の発表は、第7回西日本部会研究懇談会で予定していたものがキャンセルになったため、もう一度ご登壇いただくことにした。発表では最初期の公共的祭祀建築に関する最新データの提示と、形成期社会に関する仮説が披露された。鶴見会員からは今回の発表が「話題提供」の機会であり、論考は未だ試論段階であることが繰り返し強調されたが、発表者がこれまで地道に積み上げてきた資料に基づく大胆な試論は様々な示唆に富んでおり、会場からも多くの質問とコメントがなされた。

今回の東日本部会研究懇談会は特段新しい試みはないが、私が幹事を引き受けてから継続してきた海外在住研究者の招聘を今回もおこなった。この度の黒崎氏とは15年前に初めてテオティワ

カンでお会いしたので、こうして日本で研究成果を聞く機会を持つことができたことは、個人的に非常にうれしいことであった。参加者にとっても、普段、日本で話を聞く機会がない日本人研究者の研究を、研究懇談会場で共有できたことが利益になったと願いたい。

また今回は、会場を2年ぶりに東京大学総合研究博物館へ戻した。開催場所を他会場へ変更することで新規の参加者を呼び込むという目標が、ある程度達成されたこともあり、慣れ親しんだ会場へと戻させていただいた。段ボールの壁や島が散在するミュージズホールは研究発表や議論にお誘い向きの会場と言え、今回も議論が白熱した。

今回の研究懇談会にて、幹事の任期が終わった。4年間幹事を担当させていただいたが、毎回手探り状態で準備を行い、運営も四苦八苦であった。慣れない大役であったため、せっかくの発表に議論の時間を上手くとれない回が何度かあり、参加者の皆様にはご迷惑をお掛けした。しかし、おかげ様でどうにか役を全うすることができた。

私が担当したうち、発表者の半数以上が海外在住研究者となったが、12月の研究大会が学期中に当たる在外研究者にとって、今後も研究懇談会場の研究発表の一つの選択肢として機能してくれると思う。また、西日本部会幹事の市川氏が企画した他分野・他学会との交流や、修士・博士論文発表も継続されていくことを願っている。最後に合計5回、11組の発表者とコメンテーターの方々にあらためてお礼申しあげたい。

（東日本部会幹事：福原 弘識）



●第8回西日本部会研究懇談会 『マヤ文明に関する学際的研究—最新の知見—』

第8回西日本部会研究懇談会は、令和元年5月18日（土）、京都外国語大学5号館521教室において開催された。参加者は、一般の方々も含め24人であった。今回の研究懇談会では『マヤ文明に関する学際的研究—最新の知見—』と題して、昨年度までグアテマラ、アメリカをそれぞれ研究拠点にして国際的な学術ネットワークの中で仕事をされてこられたお二人をお招きして、グアテマラにおけるマヤ文明の二つの異なる地域と時代を題材にお話いただいた。

最初の発表者は鈴木真太郎会員（岡山大学大学院社会文化科学研究科）で、「古代マヤ文明南西周縁域の広域考古人骨研究：食とライフスタイルについて」と題する発表であった。鈴木会員の研究は、グアテマラ南海岸地方の広域人骨群を再調査し、古代マヤ文明南西周縁域の理解を進めることを意図している。具体的には、グアテマラ南海岸地方で、先古典期に属する複数遺跡から出土した考古人骨群（レイノサ遺跡、シンカベサス遺跡）を学際的に精査（巨視鑑定、同位体分析）し、古代マヤを代表する古典期の考古人骨群（コパン遺跡）と比較検証した。得られた差異は古代文明の持つ地域的なライフスタイルの多様性として議論されたとともに、類似性については周縁域が文明黎明期において果たした役割を理解する上での知見として検討された。

次の発表は白鳥裕子会員（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所、日本学術振興会PD特別研究員）によるもので、「メソアメリカ社会にみる“移動”の研究：イツァー族を例に」と題して、マヤ地域において17世紀末まで王国を維持していたマヤ先住民のイツァー族を対象に、チラム・バラムの書などに記された彼らの出自神話を、歴史学、図像学、言語学、そして考古学のデータを用いて検証した。白鳥会員は、チラム・バラムの書が伝える「歴史」を詳細に述べ、さらにスペイン人が書き残した史料や先スペイン期の碑文解釈、ご自分が発掘した考古学的資料などと付き合わせた上で、イツァー族が古典期にはペテン地方に居住しており、古典期終末にこの地域の都市が放棄されたころ、彼らも北部低地へ移動したこと、そしてカンエクの称号を持つ王がモトゥール・

デ・サン・ホセを都としていたイツァー族を率いていたらしいことを指摘した。

コメンテータとして、鈴木会員の発表には市川彰会員（名古屋大学高等研究院）が、一方、白鳥会員の発表には大越翼（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所）がそれぞれ考古学、歴史学という立場から、具体的なコメントが行なった。フロアからも盛んな質問が発表者に投げかけられた。懇談会終了後の懇親会にも参加者の大半が参加され、そこでも議論が続くというとても有意義な午後を過ごした。

（西日本研究部会幹事 大越翼）



（©京都外国語大学）



（©京都外国語大学）

●日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念国際シンポジウム「文化遺産とは何か：エクアドルと日本の自然災害を通して考える」

(Simposio Internacional, "Repensar el Patrimonio Cultural: Intercambio de experiencias post-terremoto entre Japón y Ecuador", Conmemoración del Centenario de las Relaciones Diplomáticas entre Ecuador y Japón)

大平 秀一（東海大学）

2018 年 8 月 22 日～23 日の 2 日間にわたって、エクアドル・キト市の文化遺産庁（INPC）ホール「サロン・デ・ロス・エスクードス」において、日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念国際シンポジウム「文化遺産とは何か：エクアドルと日本の自然災害を通して考える」（主催：文化庁、東海大学、エクアドル文化遺産省、エクアドル文化遺産庁、共催：在エクアドル日本国大使館、国立民族学博物館、文化遺産国際協力コンソーシアム、古代アメリカ学会）が開催された。この国際シンポジウムには、考古学者、博物館関係者、文化遺産省職員、文化遺産庁職員、その他の関係者等、最大で 75 名が参加した。

この国際シンポジウムは、文化庁委託事業『「エクアドル地震 2016」による被災博物館復興支援プロジェクト』（2018 年 6 月 15 日～2019 年 3 月 29 日）の一環として開催されたものである。同プロジェクトは、①エクアドルへの日本人専門家 6 名の派遣（本シンポジウムの開催、被災地の視察と講演[8 月 20 日～8 月 27 日]）、②エクアドル人専門家 4 名の招聘・研修（11 月 1 日～11 月 20 日）、③東京における国際シンポジウムの開催（11 月 11 日）、④シンポジウムの成果刊行（2019 年 3 月）、という 4 つの項目から構成されている。その主目的は、同地震によって被災した博物館・文化財の復興と、エクアドルにおける今後の文化財防災対策・危機管理の施策構築への作用におかれ、特に人材育成への貢献が意識された。

国際シンポジウムの初日冒頭では、在エクアドル特命全権大使閣下の野田仁氏と、エクアドル文化遺産省副大臣のアンドレア・ニナ・ペレーダ氏にご挨拶いただいた。それに引き続き、大平による趣旨説明がなされ、関雄二会員（国立民族学博物館）による基調講演「ラテンアメリカの文化遺産をめぐる日本の国際協力」が行われた。その後、小谷竜介氏（東北歴史博物館）、高妻洋成氏（奈

良文化財研究所）、和高智美氏（文化創造巧芸）、日高真吾氏（国立民族学博物館）の 4 名により、中越地震や東日本大震災における被災文化財対処の事例、文化財防災システムの構築、被災文化財の修復、被災文化財の保存・活用に関する報告がなされた。

2 日目には、大平により 2016 年 9 月の調査によって把握された「エクアドル地震 2016」による文化財被害の実状に関する報告がなされ、その後には被災博物館の担当者により、地震後に博物館が中心となって進められた事業の説明がなされた。さらに、文化遺産庁長官のホアキン・モスコソ氏、文化遺産庁マナビ支庁のマルコス・ラブラダ氏、国立博物館を統括する文化遺産省社会記憶局局長のイベテ・セリ氏により、地震以後におけるエクアドルの博物館の活動、文化財レスキューの実状、博物館組織の現状に関する報告がなされた。質疑応答では、日本のきめ細やかな被災文化財への対処・対応の具体事例に関して、大きな関心が寄せられた。

この国際シンポジウムの意図・主目的は、事前の打ち合わせを経て、被災状況・問題点を共有し、将来の防災のためにそれを記録に残すという点におかれていた。それが故に、プログラムには、被災した各博物館の担当者からの報告が組み込まれていた。しかし、それを担う報告が諸般の事情により一部キャンセルされ、内容に変更が生じたことは、極めて残念であった。

（肩書はすべてシンポ開催当時のもの）



シンポジウム終了後の集合写真

●日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念国際シンポジウム『『エクアドル地震 2016』による被災文化財支援を考える』

(El apoyo internacional a los bienes culturales frente el "Terremoto de Ecuador 2016", Simposio Internacional, Conmemoración del Centenario de las Relaciones Diplomáticas entre Ecuador y Japón)

大平 秀一（東海大学）

2018 年 11 月 11 日（土）、東京国立博物館平成館大講堂において、日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念国際シンポジウム『『エクアドル地震 2016』による被災文化財支援を考える』（El apoyo internacional a los bienes culturales frente el "Terremoto de Ecuador 2016"）を開催した（主催：東海大学、文化庁、共催：在日エクアドル大使館、国立民族学博物館、文化遺産国際協力コンソーシアム、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会）。

この国際シンポジウムは、前頁に示した文化庁委託事業『『エクアドル地震 2016』による被災博物館復興支援プロジェクト』（2018 年 6 月 15 日～2019 年 3 月 29 日）の一環（③）として開催されたものである。

この国際シンポジウムでは、冒頭に文化庁鑑査官の豊城浩行氏と駐日エクアドル共和国特命全権大使閣下のハイメ・バルベリス氏よりご挨拶をいただき、基調講演として大平がプロジェクトの内容・問題点を示した。これに対して、上記プロジェクトのメンバーで、①（前頁参照）にも参加した関雄二会員（国立民族学博物館）、日高真吾氏（国立民族学博物館）、高妻洋成氏（奈良文化財研究所）、小谷竜介氏（東北歴史博物館）、和高智美氏（文化創造巧芸）が、国際支援と被災の経験、文化財保存・活用の実践に基づく知見からコメントを加えた。

その後、「エクアドル地震 2016」以後に、被災文化財の対処・対応にあたったマルコス・ラブラーダ氏（セロス・オハス・ハボンシーリョ遺跡公園・博物館）が、マナビ県における文化財被害の概況と対処をめぐる問題点を報告し、ヤケリーネ・アルバレス氏（国立ポルトビエホ博物館・文書館）が、被災後に地域社会・子どもたちに向けて博物館が実施した活動を報告した。さらに小熊博史氏（長岡市立科学博物館）と山田隆博氏（宮城県山元町教育委員会）が、それぞれ中越地震と東日本大震災において経験・実践した、被災文化

財の対処・対応・保存・活用等に関する具体例を報告した。

最後に、関雄二会員の司会のもとで、報告者全員と国内における文化財保存・活用の豊富な経験をもつ高妻洋成氏が登壇し、復興・今後の防災対策をめぐる取り組みに関してディスカッションがなされた。そこでは、被害を記録に残すこと、日本で得た情報（失敗例含）を共有・取捨選択してできることから始めること、文化財をめぐる学術調査・研究を推進すること等の重要性が指摘された。来場者は、51 名であった。

「発見」「征服」、植民地化の歴史を経ているラテンアメリカ地域において、文化財・文化遺産の多くは、先住民の文化・歴史と深く関わっている。それらは、近代国家形成の過程で、国家の顔・独自性を構築するための「道具」となるなど、政治性に満ちた意味をも帯びさせられてきた。同地域における人類学や考古学の発展も、その政治性と不可分の関係にある。ポストコロニアル批判が拡大する 90 年代に入り、異文化ならびにその歴史を表象する装置としての博物館も、様々な議論の対象となった。その後、メスティサへや多文化主義をめぐる言説を経て、現在にいたってもなお博物館はその政治性と無縁ではない。このシンポジウム／プロジェクトは、そうした客観視された博物館の意味・様態はすべて脇におき、不可抗力である自然災害・地震で被災した博物館・文化財の復興に貢献するための実践的挑戦であった。

最後に本シンポジウム開催にあたり、本学会の会員も含め、多くの方々のご協力を賜った。ここに銘記して深謝申し上げたい。



ディスカッションの様子

●国際シンポジウム「中米地域社会の博物館」

南 博史（京都外国語大学）

本国際シンポジウムは、京都外国語大学国際文化資料館第6回研究講座として企画し、在日コスタリカ大使館、ICOM京都大会2019組織委員会、古代アメリカ学会の協力を得て、平成30年10月6日（土）に開催された。会場は、京都外国語大学の教室を利用し、55名の参加者があった。

講演者として、コスタリカ国立博物館館長ロシオ・フェルナンデス氏、コスタリカ中央銀行博物館館長ヴィルヒニア・ヴァルガス氏、コスタリカ保険公社ヒスイ博物館館長ラウラ・ロドリゲス氏、グアテマラ・デル・バジェ大学文化遺産研究科長のアナベラ・コロナド・ルイス氏、エルサルバドル国立人類学博物館館長エリベルト・エルキシア氏、エルサルバドル政府文化省から柴田潮音氏をお迎えした。

まず、国際文化資料館館長である南博史会員によって開会の趣旨が説明されたのち、コスタリカ国立博物館館長のフェルナンデス氏による地域コミュニティとの連携や文化遺産の保存活用についての講演を皮切りに、熱のこもった講演が続いた。コスタリカの3館はすでにそれぞれが連携し、博物館は国を現すものとして文化や歴史を伝える努力をするとともに、先住民の文化やマイノリティと呼ばれる人々に寄り添い、彼らの文化や伝統を重んじ、教育をする場所として動き始めている。

グアテマラ・デル・バジェ大学のコロナド・ルイス氏は、主に教育者としての立場から博物館と地域を見据え、25の言語が存在し様々な文化が混在する社会的背景の中で、マヤ族やシンカ族などのコミュニティ博物館にも着目している。これらの博物館では、コミュニティに属する者が運営を担い、自分たちの文化や伝統を発信している。コミュニケーションや学びの場としてだけでなく博物館の在り方を実践している様子が報告された。

エルサルバドル国立人類学博物館館長のエルキシア氏からは、博物館の歩みとこれからの挑戦が語られた。グアテマラもエルサルバドルも内戦があり、多くの人が犠牲となった。その過去に眼をそむけることなく、この哀しい歴史を二度と繰り返さないために、犠牲者の写真を使った展覧会の様子が紹介された。また、観光客を含めた新しい来館者を取り込む工夫として、写真撮影のポイントや手話などの活用、ナイトミュージアムの開催などが試みられている。

エルサルバドル文化省に所属する柴田氏からは、チャルチュアパのカサブランカ遺跡公園での活動が報告された。この場所は、京都外国語大学で教鞭をとっておられた故大井邦明教授によって調査が始められ、地域住民と向き合いながら環境が整えられてきた。名古屋大学やJICAの協力を得ながら歩んできた遺跡公園のこれまでの20年を振り返った。

中米の諸地域における博物館の地域に対する思いやコミュニティに寄り添う姿勢は、学ぶべきところが多い。国際文化資料館も博物館活動から世界の平和に貢献できるよう、これらの中南米諸地域の博物館と今後も連携・協働していく予定である。



（©京都外国語大学国際文化資料館）

●写真パネル展「コスタリカの魅力～先スペイン期古代文化と自然環境～」

南 博史（京都外国語大学）

本展は、京都外国語大学国際文化資料館にて平成30年10月9日（火）～11月24日（土）の日程で

開催された展覧会である。コスタリカ国立博物館、中央銀行博物館、ヒスイ博物館、京都外国語大学国

際文化資料館の4館の主催とし、在日コスタリカ大使館、ICOM 京都大会 2019 組織委員会、古代アメリカ学会のご後援をいただいた。

今回テーマとしたコスタリカは「平和」と「自然」が似合う国で、それは、中米のスイスと呼ばれるように「常備軍」を持たず、国内には自然豊かな世界遺産と多くの国立公園があり、そして何よりも平和を愛する温厚な国民性によるものと考えられている。

一方で、同じ中米に属するグアテマラやホンジュラス、エルサルバドルには、マヤ古代文明などメソアメリカ古代文明に関する多くの遺跡があつて日本でも多くファンがいるのに対し、ニカラグアやコスタリカ、パナマではそうした大きな遺跡が発見されていないことから、この地域の古代文化について日本ではほとんど知られていない。

こうしたなか、国際文化資料館では 2012 年からニカラグア、エルサルバドル、そしてコスタリカにおいて、考古学と博物館に関する調査を実施してきた。とくにコスタリカでは、国立博物館、中央銀行博物館、ヒスイ博物館が「PASEO DE LOS MUSEOS」という3館連携を開始したことをきっかけに、国際文化資料館でも各館との間で学芸と人材育成についての協働に向けた活動を進めてきた。

そして今回、コスタリカの3つの博物館と国際文

化資料館が交流協定を結ぶこととなり、これを記念して、本展覧会を企画した。各館の考古学の専門家が力を合わせてコスタリカの古代における自然環境や文化をまとめた写真パネル展の内容は、学術的にも大変高いものとなった。

国際文化資料館では、その学術的なレベルを落とすことなく、かつまだまだ十分に知られていないコスタリカの古代文化についてわかりやすく紹介するため、映像の使用や小冊子を作成するなど館としても初めての試みもあったが、期間中は343名の来館があり、好評のうちに終えることができた。



(©京都外国語大学国際文化資料館)

●国際学術講演会『土製建築をいかに保存し、活用するか：中米・アフリカの事例から』 市川 彰（名古屋大学）

2018年11月9日、名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホールにおいて「土製建築をいかに保存し、活用するか：中米・アフリカの事例から」がおこなわれた。参加者は18名であった。

主催は、名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センターである。また、名古屋大学高等研究院が共催し、古代アメリカ学会の協力事業として開催された。

古代メソアメリカ文明圏には土製建築が広範囲に分布している。しかし、高温多湿という自然環境や文化遺産保護の倫理・理念の問題など克服すべき課題は多く、土製建築の調査は停滞し、保存活用は十分ではない。では、土製建築をいかに研究し、いかに保存すればよいのだろうか。また土製建築遺産や現代に残る土の技術を継承する意義は何か。本学術講演会はこの目的意識の

もとに開催された。

筆者による趣旨説明のあと、A・ダニールズ氏（メキシコ国立自治大学人類学研究所）が「メキシコにおける土製建築遺産の保存問題：戦略と政治性」と題して報告をおこなった。ダニールズ氏は、土製建築遺産研究の大きな問題として、研究者の「無関心」をあげる。ベラクルス州では12000遺跡のうち約半分が土製建築を伴う遺跡であるが、調査が行われ、遺跡公園化されているのはわずかに3遺跡しかないという。ダニールズ氏は、ラ・ホヤ遺跡の土製建築の学際的調査と修復保存活動について紹介した。

次に、O・カマチョ氏（エルサルバドル文化省文化自然遺産局考古課）が「エルサルバドルにおける土製建築遺産保存の挑戦：政府機関からみた展望」と題して報告をおこなった。エルサルバド

ルは世界遺産ホヤ・デ・セレン遺跡をはじめ、遺跡公園化されているほとんどの遺跡が土製建築を有する。政府機関に勤務するカマチョ氏ならではの、法律や経済的観点から土製建築の研究や保存の難しさについて報告がなされた。

最後に、安田治文氏（人間居住機構第一級建築事務所代表/JICA 嘱託専門家）が「持続可能な住環境構築へ：土製建築の未来」と題して報告をおこなった。安田氏は、世界の土製建築研究を牽引する「CRAterre（クラテル）」を修了された建築家である。モロッコの世界遺産アイト・ベン・ハッドウの修復保存などの経験、土製建築文化の再生プロジェクトや途上国・被災地の居住環境改善活動について紹介がなされた。

参加者は少数ではあったが、意識の高い参加者のおかげもあり、大変充実した質疑応答が展開された。



（©名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター）

●日本アンデス調査 60 周年記念シンポジウム「アンデス文明の成り立ちを追って—日本調査団の継承と発展」

金崎 由布子（東京大学）

2018 年 12 月 22 日（土）に東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて、日本アンデス調査 60 周年記念シンポジウム「アンデス文明の成り立ちを追って—日本調査団の継承と発展」が山形大学主催、国立民族学博物館による共催で、古代アメリカ学会などの協力を得て開催された。当日の参加人数は 147 名であった。活発な議論が行われるなど参加者の関心はとても高く、会は大変盛況を博していた。

シンポジウムは第 1 部の報告パートと第 2 部の座談パートの二部構成で進められた。第 1 部では、現在の日本のアンデス研究の現状および成果に関する 3 本の発表が行われた。井口欣也会員（埼玉大学）による一本目の発表では、日本調査団によるアンデス研究について、その歩みと成果の蓄積、近年の研究展開が総括的に述べられるとともに、調査団が地域社会に対して行ってきた貢献が紹介された。関雄二会員（国立民族学博物館）による二本目の発表では、2005 年から国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学とにより継続して調査が行われているパコパンパ遺跡の研究成果が報告され、権力の生成過程という観点

から形成期の社会変化が論じられた。鶴見英成会員（東京大学）および松本雄一会員（山形大学）による三本目の発表では、2016 年より新たに開始されたワヌコ調査研究プロジェクトについて、2018 年までの 3 年間の調査成果のまとめが報告されるとともに、ワヌコ盆地の形成期の地域動態が早期に形成された景観により方向づけられたという仮説が論じられた。

第 2 部では、大貫良夫会員（野外民族博物館リトルワールド）、関雄二会員、坂井正人会員（山形大学）、井口欣也会員、鶴見英成会員、芝田幸一郎会員（法政大学）、松本雄一会員をパネリストに迎え、加藤泰建会員による司会のもと、日本のアンデス文明研究の到達点と展望をテーマに活発な意見交換が行われた。現在の到達点として、クントゥル・ワシ遺跡の十数年におよぶ調査の後に大規模研究プロジェクトを引き継いだパコパンパ遺跡の発掘調査と、クントゥル・ワシ調査で学んだ「第四世代」により展開されている新たな調査研究とが紹介され、それぞれの研究者から自身の研究の今後の展望が述べられた。最後に、長年にわたり日本のアンデス調査を率いてきた大

貫良夫会員によりシンポジウム全体が総括され、会が締めくくられた。



(©山形大学)

●国際学術講演会「マチュピチュとナスカの地上絵 最新調査からみた世界遺産」

伊藤 裕子（本学会会員）

2019年3月16日（土）、山形大学人文社会科学部1号館3階301教室において、「国際学術講演会：マチュピチュとナスカの地上絵 最新調査からみた世界遺産」がおこなわれた。

主催は、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者：関雄二）、および山形大学ナスカ研究所である。また、山形大学および国立民族学博物館の共催であり、古代アメリカ学会の協力により開催された。

この講演会では、どちらもユネスコの世界文化遺産であり、かつ先史アンデス文明を代表する遺跡として名高いナスカとマチュピチュを取り上げ、メディアによってつくられた「ミステリー」のイメージで扱われがちな両者について、最新の研究成果にもとづく報告がなされた。

はじめに、坂井正人会員（山形大学）が「山形大学のナスカ研究：学際的アプローチによる最新成果」と題して講演をおこなった。講演では、ナスカの地上絵において長年続けられてきた考古学的見地からの調査研究に加え、認知心理学の専門家の協力により、遺跡を利用した当時の人々が認識していた地上絵の姿をさぐる研究について報告し、学際的なアプローチによって新たな知見が得られる可能性について述べた。

続いて、ルーシー・サラサール氏（イエール大学）が、「マチュ・ピチュ：調査の歴史と新たな解釈」と

いう講演をおこなった。講演では、マチュピチュの発見者として知られるハイラム・ビンガムが率いた調査隊による、1910年代の調査に対する批判的な評価に対し、その妥当性について検討した。

最後に、リチャード・バーガー氏（イエール大学）が、「理化学的手法で明らかとなったマチュピチュの日常生活」と題して講演をおこなった。この講演では、最新の研究成果をもとに、長年謎とされてきたインカ帝国末期におけるマチュピチュ社会についての報告がなされた。特に遺跡の内部に埋葬されていた人々の日常生活について考察し、当時のマチュピチュが、帝国内の複数の地域から集まった、それぞれ異なる文化を持つ人々の複合的な社会であったという仮説について論じた。

講演会は参加者92名の盛況となり、最後の質疑応答にはマチュピチュ研究に関する質問が寄せられ、同遺跡への市民の関心の高さをうかがわせた。



(©山形大学ナスカ研究所)

●国際シンポジウム「Nuevas Perspectivas a la Formación de Civilización Temprana en Los Andes: Cronología, Interacción y Organización Social/アンデス文明形成過程をめぐる新たな視角：編年、交流、社会組織」

中川 渚（国立民族学博物館）

2019年3月21日（木）、国立民族学博物館第6セミナー室において、国際シンポジウム「Nuevas Perspectivas a la Formación de Civilización Temprana en Los Andes: Cronología, Interacción y Organización Social/ アンデス文明形成過程をめぐる新たな視角：編年、交流、社会組織」が開催された。本シンポジウムは、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者：関雄二）、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、山形大学ナスカ研究所が主催し、古代アメリカ学会の協力で実施された。このシンポジウムでは、アンデス形成期における最新の研究成果が報告され、編年、交流、社会組織に関する問題が議論された。あいにくの雨であったが、当日の参加申し込みもあり20名が出席した。

はじめに、関雄二会員（国立民族学博物館）より本シンポジウムの趣旨が述べられ、各報告に移った。松本雄一会員（山形大学）と山本睦会員（山形大学）による報告「Las fronteras del fenómeno Chavín/ チャビン現象の境界」では、従来チャビン領域のフロンティアに位置付けられてきたペルー北部高地およびペルー南部高地において、形成期後期に起こった社会変化がどのように理解できるのかをそれぞれの地域内外の交流の変化から丹念に論じた。

つぎに、関会員と中川渚（総合研究大学院大学）による「Expansión o consolidación?: La transformación de la sociedad del Formativo Medio al Formativo Tardío en la sierra norte del Perú/ 拡大かそれとも強化なのか：ペルー北高地の形成期中期から後期にかけての社会変化」と題した報告では、ペルー北部高地の祭祀センターであるパコパンパ遺跡において、形成期後期に起こった変化が他地域に起こった変化と連動していたと考えられ

る一方で、パコパンパ社会のリーダ層の関心は主に地域内部に向いており、戦略的な地域統合を推し進めたと解釈できることが様々なデータとともに示された。

リチャード・バーガー氏（イエール大学）とルーシー・サラサル氏（イエール大学）による報告は「Reconsideración del fenómeno Chavín: Nueva cronología y síntesis/ チャビン現象再考：新しい編年と概括」と題し、氏らが再調査を開始したペルー北中海岸のカルダル遺跡の成果を提示した。建築属性の比較や土器の胎土分析結果から、地域文化として一括して捉えられてきた同地域の各センターが基本的にはそれぞれ独立し、競合状態にあり、儀礼における相互参加や姻戚関係などで結ばれた関係であったことが示された。

坂井正人会員（山形大学）の報告「Nasca como una sociedad del Formativo Final/ 形成期末期社会としてのナスカ」では、隣接する河川でそれぞれ形成された社会が形成期末期から前期中間期初めにかけて、谷をまたいで交流する状況とその変遷が地上絵の位置や遺跡分布等から論じられた。

各報告の後の質疑応答の時間では質問が続出し、さらに最終討議では時間が足りなくなるほど活発な意見交換が行われ、盛況のうちに会は終了した。



（©山形大学ナスカ研究所）

事務局からのお知らせ

1. 第 24 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 24 回研究大会・総会を、2019 年 11 月 30 日（土）と 12 月 1 日（日）の 2 日間にわたって、南山大学で開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

なお、本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による別紙「第 24 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、別途送付しておりますハガキにて 2019 年 9 月 30 日（月） までにご連絡くださいますようお願い申し上げます。総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。また、11 月 30 日の総会終了後に懇親会を企画しておりますので、あわせてご出欠についてお知らせ下さい。

記

古代アメリカ学会第 24 回研究大会・総会

- (1) 日時：一日目 2019 年 11 月 30 日（土）
研究大会 13:00～17:00（予定）
総会 17:00～18:00（予定）
懇親会 18:30～（予定）
二日目 2019 年 12 月 1 日（日）
研究大会 09:00～12:00（予定）
（発表本数が多い場合は午後の部も行います）
(2) 会場：南山大学 Q 棟 101 教室
（愛知県名古屋市中区山崎 18）

2. 第 24 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 24 回研究大会実行委員長
渡部 森哉

会員より申請があった研究発表等については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許可の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、返送用ハガキの「発表申請」の「有」をマルで囲んでご返送下さい。

- ① 発表申請者（会員に限ります）
- ② 発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
- ③ 発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
- ④ 発表タイトル
- ⑤ 発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
- ⑥ 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
- ⑦ 発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1・2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×40 行、横書き、余白は上 35 mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。

（＊発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします）

＊送付先：jssaa@sa.rwx.jp（学会事務局）

＊締切：2019 年 9 月 30 日（月）午前 10 時
（メール必着）

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第 20 回研究大会より分科会枠を導入しています。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3・5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で実施され、発表時間が重

なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人1回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者（変更不可）、趣旨説明（1200字程度）、全発表者の要旨（各800字程度）を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです（上記をご覧ください）。なお分科会代表者・発表者は、返送用ハガキの「発表申請」の「有」をマルで囲んでご返送下さい。

審査結果については、10月15日（火）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

＊参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成23年12月2日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

【内容】

(1) 研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2) 発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。

【形式】

(1)（口頭発表をおこなうことができる者）

口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第2発表者以下でも差し支えない。

(2)（発表者および共同発表者の記載順）

発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第

2 発表者以下の共同発表者となることできる。

(3)（複数の口頭発表についての制限）

1回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人1回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることできる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第23号（2020年12月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集します。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目（ウェブサイト掲載）をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります（2020年3月31日提出締め切り）。

「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2020年5月20日です。

「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後1～2か月程度で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：

杓谷茂樹（運営委員、会誌編集担当）

〒923-0921 石川県小松市土居原町10-10

公立小松大学国際文化交流学部

Tel. 

Fax. 

E-mail : aant.edit@gmail.com

②会報「45号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願いいたします。

【内容】

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会

の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

【形式】

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

【掲載】

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

【投稿先・締切】

○添付ファイルの形で下記までメールにて送信してください。

お問い合わせ先：

小林貴徳（運営委員、会報編集担当）

E-mail：XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 2020 年 5 月 15 日（金）

○発行予定 2020 年 6 月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されています。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号：1211948(普)

口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2,000 円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

〈事務局からのお願い〉

現在、古代アメリカ学会では、学会とかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

